出久根達郎
むほん物語

中公文庫

中公文庫

むほん物語（ものがたり）

定価はカバーに表示してあります。

1997年10月3日印刷
1997年10月18日発行

著者　出久根達郎（でくねたつろう）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Tatsuro Dekune

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202962-7　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

むほん物語

出久根達郎

中央公論社

目次

そもそも奇妙頂礼 7
犬の鼻　猫の耳 67
——天保八年貸本屋日記
傷に囲まれて 163
さんげさんげ 227
終りよければすべて由無し(よしな) 287
解説　香納諒一 329

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

むほん物語

そもそも奇妙頂礼

妻がふくれるのも無理はない。

組合の役員はひきうけるわ、得体の知れぬ日記に夢中になるわ、会合と称して外出が過ぎるわで商売そっちのけ、ところへ突然、目的と日程不明の旅行をする、ときりだしたのである。誘ったのが古典堂の平八郎と知って、珍しく色をなした。

「私にとって旧主ですから、とやこう申したくありませんが、あの方は昔から遊ぶことばかり考えているお人です。ひまさえあると探偵小説に読みふけっている。ときどき変装したりして妙な方です」

「変装するのかね」

「鏡をのぞいては表情の研究をしていました。あの人の衣類はどれも、裏表、両方着られるようになっているのよ」

「平さんはいつも赤いのを着ているぜ」

「裏地は黒や白やグレーやいろいろです。おかしな趣味だわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻は学生時代、古典堂のアルバイトをしていた。平八郎は、本名ではない。好んで赤色を着けているので、赤穂義士討ち入りの際、女装して奮戦した吉良の用人、小林平八郎に擬したあだ名である。侍のようないかつい体つきと、ぶばった物言いをする。お互いさま古本屋の二代め、しかも同い年の三十八だった。

「あの方の洋服のポケット、どれもコブのようにふくらんでいるでしょう？　ゴミためのように、ありとあらゆるガラクタがつまっているのよ」

「まあ一種の奇人かもしれないが、悪い奴じゃない」人に聞かせる友人の評語は、どうしても平凡である。

「あなたたち二人は、ホント子供っぽいわ。顔をあわせないと寂しがり、どこへ行くにも肩を並べて。あなたたちのような仲を、おみきどっくり、と称するのよ」

「なんとでも言え」

妻は、やっかんでいるのかもしれぬ。

朝一番の新幹線に乗った。目的地は未知の土地である。平八郎がそこに待っている。何をしようという旅なのか、教えてくれない。とにかく出てこい、と現地から呼びだしがかかったのである。遊びだと妻にきめつけられても、確かにこれでは反論できな

い。

平八郎に到着時刻を連絡せねばならぬ。列車の電話ボックスから、彼の待つ町の旅館にコールした。つながらない。ウンでもなければ、スンでもない。何度操作してもテレフォンカードが戻ってくる。無効なはずはない。

カードは同業の尾張屋書店が、二年前、創業百八十年記念に配ったものである。北斎の「絵本東都遊」よりとった絵草紙屋「蔦屋重三郎」店頭の景に、「古書肆・尾張屋・創業文化七年」の文字が配置してある。尾張屋は古本屋の中でも屈指の老舗であった。

五百度数の美麗なカードは、今日が使いはじめである。長距離用に便利と、わざわざ選んできたのが裏目に出た。小銭の持ちあわせがない。なお何度か試みたが無駄であった。

自宅にかけてみた。かかった。カードの不良や機器の故障ではない。妻が報告した。出かけたあとで同業者から電話があった。ただし名のらず用件も述べなかった。出張ですね、と確かめたそうであった。妻の機嫌は直っていた。

改めてもう一度、平八郎にかけてみた。やはり通じない。番号を聞き違えたとも考

えられる。住所はわかっているし、なんとかなるだろう。どうせ今さらひき返せない。出だしから、ぎくしゃくした、妙な塩梅の旅になった。悪い予感であったかもしれぬ。

そもそもが変てこな成り行きであったのだ。

東京には一九九二年現在、約八百軒の古本屋がある。この数字は、組合に加入している業者数である。組合は大正九年（一九二〇年）にできた。すなわち西暦二千年に、創立八十周年を迎える。新しい世紀が区切りの年に当るゆえ、組合として記念事業を行うことになった。

まず組合史の発刊がきまった。すでに一千頁もの『五十年史』がある。創立以来の歴史を、改めて詳述する必要はない。『五十年史』以後をつづればすむ。しかしそれでは見すぼらしいという理由で、古書および古本屋に関する種々の資料を収録する構想がまとまった。

小生と平八郎、他五名が実行委員に選出された。事実上『八十年史』の編纂委員である。われわれ二名以外は年長だった。

さっそく全国の業者に触れを回し、資料の提供を求めたところ、珍奇な物が山と寄せられた。「ある所にはあるもんだな」と平八郎が感嘆した。「いや、これは貧乏人と古本屋の口癖だがね」

最古の公開図書館といわれる石上宅嗣の「芸亭院」蔵書目録断簡や、菅原道真の書斎「紅梅殿」旧蔵書から、江戸時代の古本屋の引札、看板、のれん、売掛帳、売買記録簿等、おもいがけない品ばかり。ある所には、ある。確かにそうだが、しかしまあ珍本稀覯の書の、最大のコレクターが古本屋であって何ら不思議はない。

編集会議がいく度か開かれた。集まった資料の、何を使い何を捨てるかの会議である。いかがわしい珍品も少なくなく、委員の眼識がためされる場であった。自分には荷のかちすぎる役だと、そのとき気がついたが、あとの祭りである。

問題になったのは、『笈の角文』なる表題の、自筆稿本であった。和紙つづりの、一冊が約五十丁で、七冊ある。うち二冊には表題がない。しかし本文の筆跡は明らかに同一人である。内容は、幕末期の貸本屋の日記であった。

当時の古本屋、貸本屋の記録は、きわめて少ない。まして当事者の、日常を克明に記したものは皆無である。書物を扱う業者であり、文字に親昵しているはずの人たち

なのに、おのれのなりわいを客観的に見つめようとしなかった。日記をつけていた者はいたかもしれないが、伝わらなかった。書物売買の商いを誰も重要と思わなかったのであろう。

貸本屋は古本屋の同類だが、業態が異なる。古本屋の歴史に加えるべきかどうか。会議が紛糾したのは、しかしそのことではない。何はさておき『笈の角文』が果して本物かどうか、であった。

初めて世に現れた資料なのである。物の真贋を見きわめ、本物のみを顧客に納める古書業者が、おのが業史に、得体の知れぬ文献を掲載するわけにいかない。

専門の研究家にゆだねれば事は簡単だ。そこがそれ、おのおのひそかに書物鑑定の尤(ゆう)を自負する古本屋、人頼みをいさぎよしとしない。あくまで自分たちの手だけで、まとめたい。委員の面目もある。ところが委員の誰もが、恥をかきたくなし、泥をかぶりたくもないから、当りさわりのない意見しか述べぬ。要するに自信がないのである。

「おれたち二流の商売人を選任した理事たちが節穴なんだよ」委員の一人が自嘲すると、三、四人が笑顔で同調した。そのくせ誰も自分を二流と思っていない。

「大体だな、組合史の発行計画がまちがいなんだよ。言いだしべが誰か知らないけど、金のむだ遣いだよ。大きな声じゃ言えないが」と大きな声でぼやく者もいる。

「木槌屋さんが入院さえしなければなあ」

話はいつもそこに落ちつく。

「こんな日記の鑑定くらい」

「鶴の一声だったんだがね」

それが結論だった。

木槌屋大四郎は古書業界の最長老であった。九十二歳。古書組合結成の音頭とりであり、わが国近代の古書史は、この人を抜きにしては語れない。埋もれた古典籍の数々を発掘し、学界に貢献した。

もっとも著名な掘りだしは、昭和四十八年、第一次石油ショックの年の、『今昔物語集』本朝の部、第二十一巻であろう。『今昔物語集』全三十一巻のうち現存は二十八巻で、巻八（震旦の部）、巻十八（本朝の部）、巻二十一（同）の三巻は、古来、伝わらなかった。失われて古く、この世にないだろうといわれていた。世紀の大発見と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com